

井上靖覚書——「花のある岩場」を中心に——

渡 邊 二 味 子

七歳ころであつたらうか。明るい春の、風の強い日、私は誰かに背後から抱いて貰って、庭の隅の古井戸を覗き込んだことがある。苔むした古い石組と生ひ茂つた羊歯、ひやりとする冷たい空気、地上から落込んだその方形の空洞の底には、動かぬ水が錆びた鏡のやうに置かれてあつた。思ふに、私の生涯に大きい関係をもつ何ものかが、初めて私の軀の中に這入り込んできたのはその時であつた。

若し私が幼時のその春の日の一刻を持たなかつたら、刺客の冷たい瞳を埋めた地中の暗処をのぞかなかつたら、——私は二十歳の時友の眉間を割り、二十五歳の時思想運動に奔り、三十歳の時恋愛に生命をかけ、三十五歳の時絶望の思ひをもって永定河を渡り、四十歳にして或は市井に名をなしてゐたかもしれない。

併しすべては違つてゐた。あの北支永定河の川波に乱れ散るこの世ならぬ白い陽の輝きに、ふと生命惜しからぬ戦ひの陶酔を味はつた以外、あらゆることに、私は怠惰であり、常に傍観者でしかなかつたやうだ。

これは詩集『北国』の中の一編「瞳」という詩であるが、ここに「私（井上靖）」が人生を傍観者で終わつてしまおうとしている、生きる上で何ものにも無関心、無感動、己れを何物にも染まらせようとしぬ強固な志向を覗うことができる。この井上の孤独な精神は、彼の作風、文体の背景にあるそれにごうかたなく共通する。

井上靖の書く小説は、扱う内容から大別して五つの群にまとめられると考える。その一つは「風林火山」「天平の

「薨」を代表とする歴史物。次に「敦煌」「樓蘭」という西域小説。「蒼き狼」などは、私の場合この中に含めてみる。そして「闘牛」「氷壁」の系統に属するもの。四番目には「獵銃」「孤猿」「比良のシャクナゲ」といった作品群。最後に、自伝的な「しろばんば」「あすなる物語」「北海」など一連のいわば井上靖の青少年時代の体験が根底にある「隨筆」にごく近い小説である。その他、彼の場合『美しきものとの出会い』『わが一期一会』をはじめとする諸々の隨筆、『北国』『運河』『季節』他の詩集等も多く出している。四十歳過ぎてから本格的な創作活動に入ったにもかかわらず、その作品は驚く程の数にのぼる。これらの作品を五群に分けて比較してみてもおもしろいと思うのであるが、それぞれの群には又それぞれ問題があって、今それを企てるには少しばかり資料不足であるので次の機会を待つとして、ここでは彼の短編を二、三取り上げて検討してみることにする。

「花のある岩場」は昭和三三年五月、新潮に発表された。主な登場人物は、老登山荷物運搬人の野本徳次と、重宗時也という若い暗い印象を与える青年である。井上の得意とする「山」を舞台にしたもので、野本徳次が重宗時也に「道案内人」として呼ばれる場面から始まる。

本来荷物を運ぶ役目を仕事とする徳次であるのだが、重宗は彼を単なる道案内人としてあつかい、回を重ねた今では上高地から涸沢までの行程の話相手として連れて行く。徳次は徳次で、重宗という青年が「妙に好き」であって、「たいした人間の一人」と思っ接している。重宗と歩き出すと「一種の陶酔」さえ感じてしまうのである。こうした男性は、井上の作品に実に多い。特に先に分類した三つ目に属するものの主人公、たとえば「闘牛」の津上、「射程」の諏訪らである。

冷たいそのくせ冷たいままでねっとり燃えているよ
うな、放恣な、濡れた眼をしている（「闘牛」）

津上と別れたくても別れられないのは、さき子にとってこんな津上が時々顔をのぞかせるからであった。「牛の勝負に賭けるため」という言葉をきいてこんな顔になり、「一枚の鉛の絵」を描く。生きる手懸りとして大スタンドでの牛の闘いに賭ける人々が、その情景が津上の頭に鮮明に浮かび上がるのである。戦後のすさまじった風潮を何とか変えてしまいたい欲求、自分自身へのそれが沸いて来ると、闘牛大会開催のために彼は全精力を傾ける。

ここには一見、井上自らがよく言う「人生を、マジヤ

ンでいえばおりてしまった」人間とは正反対の意欲的・積極的に生きようとする人間があるようにも感じる。しかし実際には、彼らが何か行動を起こせば起こすほど、何かしようにとすればするほど、孤独が近付いて来て、それに取つかれて身動きできない自分にされてしまう、という皮肉な結果になってしまうのである。

話を元にもどそう。重宗がいつもいっしょに連れていた千田成子と徳次との三人が山に登る。徳次はかねてより二人が結婚するものとはかり思っていた。それを尋ねてみると、重宗は、「そんなわけには行かない」と否定するが、あきらかに好い感じを持たぬ返事であった。他の男に嫁ぐことになった成子を誘って、もう二度と踏むことのないであろう稜線を彼はどんな思いで歩んだのだろうか。途中、徳次はふとこんなことを考えた。この二人のために、「自分だけが知っているあの白い花の咲く場所を披露してやろう」と。それは植物学者若原武との二人だけの秘密となっているシコタンハコベ畑であった。せっかくの話を重宗は強い語調でさえぎる。「たとえ死んでしまったとしても、それはその人のものとしてとっておきなさいよ。」秘密は秘密としてあくまでも守り通さなければならぬという態度なのである。

三人の下山は、天候も悪くなった闇の中を進むことにな

る。自分が足を降ろした岩が揺れるのを感じて、危ないから気をつけるように声をかける徳次であった。重宗は「懐中電燈が成子のために、問題の岩の上に当てられるのを見」たはずなのに、成子の足がそれに降ろされようとしているのを目の前にしながら一言の注意も与えない。徳次はこの全く思いがけない重宗の行動に対して、又その一瞬、転落する成子の姿をただ果然と見つめるだけで、どうすることもできない。このことが意味するのはやはり「重宗時也は千田成子を永久に自分のものにして置きたかった」ということなのだという考えに突き当たった。徳次はこうしていくつめかの自分しか知ろうはずのない秘密を持つことになる。善良な平凡な生活を送ろうとする者にさえ、井上靖は容赦なく「孤独の影」という重い荷物を背負わせてしまう。

この徳次に比べ、重宗時也の「傍観者」になつたはずの身の裏側に「眉間を割」らずにはいられなかった部分が潜んでいたということは、ひょっとすると彼自身もこうなることを予期していなかったのではあるまいか。ほんの一瞬の沈黙——傍観者——を通じたことが成子を死なせた張本人ということになってしまったのである。この本当に微妙な裏表の関係が、本人には何も語らせないことによってよりいっそう大きな問いかけを読者に投げかける。この問題を考える時、私にはいつも心に浮かぶ作品がある。志賀直

哉の「范の犯罪」である。范という支那人の奇術師が、的となっていた妻にナイフを刺してしまった。妻はその場で死ぬ。この死は事故であるかあるいは過失であるかという内容だ。裁判官ひとり、座長、助手、そして范本人に次々と質問をして行く。彼らはそれぞれに心にあるがままを正直に述べるのであるが、結局は過失なのか故意なのかは誰もはっきり申し述べはできない。裁判官は話を聞いて行くにつけ「何かしれぬ興奮の自身に湧き上がるのを感じ」と「無罪」という結果を出すのであった。ただ志賀は、相手の（自然な）死を願うのは、自らが手を掛けて死に至らしめることよりもっと恐ろしいことだと范に言わせている。その点、重宗は范の背負ったものよりもかなり重いものを持ってしまったということになるか。

私の近い従弟で、あの小説にあるやうな夫婦関係から自殺してしまった男があった。私は少し憤慨した心持で、どうしても二人が両立しない場合には自分が死ぬより女を殺す方がまじだったといふような事を考へた。氣持の上で負けて自分を殺して了った善良な性質の従弟が齒がゆかった。そしてそれに支那人の奇術をつけて書いたのが「范の犯罪」である。〔創作余談〕

裏切りの行為をとった妻との生活は、范にしてみれば本当の生活がないということであって、毎日をただ苛々した氣持ちで過ごしている。事件前日には「殺した結果がどうだろうとそれは今の問題ではない。牢屋へ入れられるかも知れない。しかも牢屋の生活は今の生活よりどの位いいか知れはしない。其時は其時だ。其時に起ることは其時にどうにでも破ってへばいいのだ」〔范の犯罪〕という考えにまですすむ。志賀はここで「自然な生命衝動によつて起るいっさいの人間の行為は許される」（井上良雄）ところを描くが、井上の場合は「殺した結果」が背後姿に冷たく重い何かを背負わせて生きる男にしてしまう。范のように殺してしまふまでのとくとくとした内情の吐露はさせずに、たったひとりの証認徳次をして「ぶるっと身振り」させ、彼までも孤独者にしてしまふくんだりなどはいかにも井上らしい。子供の頃覗いてしまった錆びた鏡のような動かぬ水にはすでにその時志賀というならば「罪ではない」ことを犯した人間のその後の姿が映っていたのかもしれない。井上にとって「傍觀者」であり「孤独者」であることが大切なのである。そのためには殺人さえせざるを得ない。何でもないように語られるのがいっそう凍るほどの冷たさを見せる。

——人生の白い河床をのぞき見た中年の孤独なる精神と肉体の双方に、同時にしみ入るやうな重量感を捺印するものは、やはりあの磨き光れる一箇の獵銃をおいてはないかと思ふのだ。

（詩集『北国』より「獵銃」）

私はふと、ああ、あの獵人（ひつねり）のように歩きたいと思うことがある。ゆっくりと、静かに、冷たく——。

（小説「獵銃」）

こうなると、もはやこの「孤独」は井上の体質から来るものと考えてよいだろう。

井上靖は戦後、文壇で最も読者層の広い作家の一人として今日に至っている。その魅力の一つは彼の中にある「孤独者」であろう。「獵銃」や「鬪牛」「比良のシヤクナゲ」などいづれをとってみても、そこに描かれている主人公の後姿はひどく寂しい。獵銃をかついだ中年男の背後姿にひきこまれた「私」が、その人に発見したのは、人生の白い河床をのぞき見た孤独なる精神だった、というのが詩「獵銃」である。そして「私」もその人のように歩きたいと思うのだ。

その日がやって来たら、その比良に登って行く日は、わしにとって随分淋しい日だらうなど、わしは思った。なんといふか、堪らなくじっとしてゐられないやうな、誰に語っても自分の氣持が解って貰へないやうな——、そう、孤独といふ便利な言葉がある。絶望といってもいいかな、孤独、絶望、さう、これだな、わしは大体、こんなしゃれた青っちょろい言葉は嫌ひなんだが、この言葉が一番あの時の氣持を言ひ現わすのに適當のやうな氣がする。

（比良のシヤクナゲ）

ここにもやはり井上が常に求める「孤独」がある。

生きものの命断つ白い鋼鉄の器具であのように冷たく武装しなければならなかった。

（「獵銃」）

という孤独をかかえた人物が井上靖の世界にいる。彼らが、詩集『北国』に「私」として現われる。「私」の凍るような後姿は、井上の作品に一貫して深い孤独の影を帯びた人物なのである。そしてまた、愛する女の死を横にながめながら身動きしようにもできないでいる男であり、子供の死を信じられずに、湖を見ようとしなないで悲しむ父親（「星

と祭」でもある。

救いようのない寂しい人間を描きながらも「花のある岩場」を初め諸々の作品が、作品としては暗さだけではなく、かえって淡淡とした白さを読者に与えるのは、井上靖の文体と、詩的であることの特徴であろう。

たとえば、谷崎潤一郎、太宰治のような作家を想い浮かべる時、はっきりとその色調のちがいを知ることができる。だから、井上の場合むしろ癖のないところ、体臭のにじみ出ないところにその特質を持つようとしているかのようでもある。

あくまで色のつかない、固有の色を持たない文体であろうとしているところに、その特質を持つようとしている。
〔井上靖の文体〕

という林巨樹の言葉に頷かざるを得ない。固有の色を持たないのは、井上の小説の文章であり、詩である。そんな固有の色を持たない小説や詩のどこに人々は魅せられるのであろうか。それはやはり第一にストーリーテラーとしての資質と、第二には新聞記者時代に身につけた文章作法によって支えられているということがあげられる。佐藤春夫が、「獵銃」を評して

何はともあれ第一に面白い。理屈なく面白いに相違ない。——中略——小説の面白さというものを大ぶん暫く忘れようとしている我国でそれを久しぶりに思い出すせるに足るものに思えた。

と言ったり、

井上靖氏の小説作品は、戦後の荒廃しきったわが国の情操の世界に吹き入った、さわやかな一陣の微風であった。
〔新潮文庫「ある偽作家の生涯」解説〕

という神西清の言葉をみても、井上がストーリーテラーとして読み手に与えた影響は新鮮なものだったといえる。

ストーリーテラーとしての資質は、増々新聞記者としての仕事の中で、彼の内面に培われていった文章作法によっても成長していったのであろう。井上靖の書く詩のいくつかを読むと、そこに詩としてキラリと光るものの他のすべてが、過去に彼が手掛けたにちがいない新聞記事の特色をそのまま持っているといっても過言ではないほどに、新聞記者時代に獲得した文章作法が、生き生きと息づいていることに気づくであらう。たとえば『北国』の中の「人生」

一つをとってみても、この散文詩での、詩語らしい用語は「——私は突如語るべき言葉を喪失して口を噤んだ。人生への愛情がかつてない純粹無比の清冽さで襲ってきたからだ。」の部分のみにすぎない。あとのほとんど大部分は、淡々とした叙述文（主観語のない新聞記事そのままの）である。だがしかし、この詩はある種の衝撃を与える。最初から「——」までは、表面さりげなく世の常の自然のありさまを描いている。それが突如、後のわずかの行でさし示す隠された運命的な意味を、鮮烈なイメージが閃くように暗示され、人に戦慄に似たものを感じさせるのである。

このように、どんなドラマチックな事件でも、状況でも、井上はまことに表面さりげなく、淡々と描写したり叙述する。それが彼の文体の基調をなしており、かなり主情的な散文詩でも「歌う」ことを拒絶し、「正確な散文によって正確な形象を描く」ことを自らの文学の出発点としている。つまり、表面あくまで色のつかない、固有の色を持たない文体であろうとしているといえるのである。

前出の林巨樹は、井上靖の文体の特色のもう一つに、河盛好蔵のいう「温度の低い文体」（「井上靖論」）を挙げている。「猟銃」のような心理の葛藤を描かざるを得ない作品でも、井上は散文詩とあまり変わらない文章で書いている。人物の内面描写や自然描写の場面では特にそうである。

そして、このさらりとした格調は、いつもみごとに均質性を保ち続けているようだ。というよりは、均質性を保つことによって、自己の色調、音色を保とうとしている。すなわち、温度の低い文体とは、ほとんど書き手の熱っぽい体温を拒むことであってつまり体臭を感じさせないところに井上靖の文体が、多くの人を惹きつけ、現代的魅力を持つ理由があるのである。

「花のある岩場」は、短編ながら井上の持ち味が充分生かされた作品であると言つてよいだろう。ストーリーのおもしろさはもちろん、重大な事件に遭遇しながらもどこか読み終えた時、悲愴感よりもさわやかさを感じる。辻邦夫が、学生だった頃井上靖の小説を読みふけていて、と、「ふまじめなものを読んではいけない。」と見も知らぬ女性に本を取り上げられたことがあったというようなことを書いていた。このことはひょっとすると井上の小説の危険性を教えてくれる重要な手がかりの一つであろう。今その「ふまじめ」という意味をよく理解した上で彼の作品に接しなければと思う。

（本学職員）